

教育における体験と生活世界 (Lebenswelt) －現象学的還元を手がかりにして－

石 村 秀 登

はじめに

小学校2年生「算数」の教科用図書には、「時計を生活に生かそう」という章が設けられ、時刻と時刻の間を時間と呼ぶことが、図入りで説明されている⁽¹⁾。しかし、「時刻」と「時間」は、広辞苑によれば次のように定義されている⁽²⁾。

「時刻」：①一瞬一瞬を刻みつつ流れるものとしての、とき。②時の流れにおける或る一瞬。時点。普通、地方時を用い、正午からの時間によって表す。以下略

「時間」：①時の流れの二点間（の長さ）。時の長さ。②俗に、時刻②と同義。以下略

教科用図書の説明自体は誤りではないし、小学校2年生であるから、「ただし、時間と時刻が同義で用いられることもある」という内容を省略したに過ぎない、という説明で事足りるのかもしれない。また、ことばの定義として、本来は時点間と時点そのものという区別が適用されるべきなのであるから、この説明でよいとすることもできるだろう。けれども、我々は、ある時点そのものを意味する場合でも、例えばおよそ「時間を守りましょう」と表現しているにもかかわらず、当該文のような区別をして実際に時間と時刻の概念を教えている。つまり、現実には「時間」の概念と「時刻」の概念が複雑に絡み合っているということを取りあえずは保留し、一定の明瞭な知識を成立させるという作業が行われているのである。

このようなプロセスは、いわゆる科学的知識の成立において顕著である。ヴァーゲンシャイン (M.Wagenschein) は、科学的知識について、おそらくは我々人間の現実の生活を基にして創られたであろう様々な概念が、我々の日常生活を直接に反映していない形で知識として発展し、利用され、語られ、教えられているとする⁽³⁾。しかしながら彼は、このような科学的知識の在り

方を批判し、教育においては、我々の生活と科学的知識の密接な関係を取り戻すべきであるとするのである。

ところで、我が国の学校教育におけるいわゆる「体験的な学習活動」も、上述のような科学的知識の成立を目指しているものであると言える。なぜなら、すでに指摘したように⁽⁴⁾、「体験的な学習活動」の目指すところは、我々の日常の生活体験を、一定の方向性をもつ経験へと高め、獲得させたいある一定の知識へと捨象することであるからだ。そこで、本論考では、現象学（Pänomenologie）における生活世界（Lebenswelt）の概念を手がかりにし、教育における体験の位置づけについて考察することにする。

1 現象学とその方法

周知のように、現象学は20世紀哲学の主潮流の一つである。フッサール（E.Husserl）は、次のように述べる。「いわゆる『認識論』が登場し、超越論的哲学が真剣に試みられるようになって以来の哲学史の全体は、客観主義的哲学と超越論的哲学とのあいだの激しい緊張の歴史である。すなわち、一方では、客観主義を維持してそれを新たな形態に仕上げようとする試みと、他方では、超越論的主観性の理念とそこから要求される方法とにともなう困難を克服しようとする超越論主義の試みとの歴史なのである。」⁽⁵⁾この対立の解消を、フッサールは、認識批判学である現象学に求めようとする。フッサールにとって哲学は、厳密で根源的な基礎をもつ学であらねばならず、そのためは、一切の先入見を排し、我々の意識に直接に与えられている現象を明らかにしなければならない。したがって、「事象そのものへ（Zu den Sachen selbst）」接近するためには、そのような意味での学、つまり現象学が必要なのである。

この現象学の理念は、哲学においてはもちろん、哲学以外の諸科学にも多大な影響を及ぼしている。例えば教育学において現象学は、一般的に次のように理解され取り入れられてきた。「まず、フィッシャー、ボルノー、ランゲフェルトのいずれの構想にあっても共通に見られることは、現象学が『方法』として教育学に導入されているということである。」⁽⁶⁾「現象学を方法としてとらえ、それを教育学に導入するということは、とりもなおさず、かかる『開かれた方法的態度』をとるということにほかならない。そしてその際、具体的方法として浮かび上がってくるのが、フィッシャーやボルノーにおいて見られたように、たとえば『記述』という方法である。」⁽⁷⁾特にボルノウ（O.F.Bollnow）は、このような立場から教育学における記述の重要性を訴え、日常的に用いられる平易な言葉でもって教育の様々な現象を詳細に記述して

解釈するという、現象学的＝解釈学的方法としての「教育学における人間学の見方」を確立したのであった⁽⁸⁾。

また、社会学においても、例えば社会的行為の現象学的分析を行ったことで知られるシュッツ (A.Schütz) は、我々に与えられている日常の社会生活の構成を分析する方法として現象学が必要であるとする。シュッツは、フッサールの現象学的還元 (phänomenologische Reduktion) により、我々の日常の社会的世界をいったん括弧でくくることができ、それが社会的行為の分析にとって重要であると考えた。我々は、日常のなかで他人とともに生活し、共に行動したり態度決定をしたりしているが、それは改めて自覚されることのない世界である。シュッツは、そのようないわば自明の社会的世界が構成されることそのものに対して分析を加えることが、社会学の課題であるとするのである。

しかしながら、教育学や社会学の領域で取り入れられている現象学は、フッサール現象学そのものではない。そのことをシュッツは、次のように述べている。「…現象学的還元の内部で私たちが分析を行うのは、この分析が内的時間意識の現象に関する正しい洞察を獲得するのに必要な限りにおいてである。日常的な社会生活における意味現象を分析する本書の意図は、これを凌駕する超越論的経験の獲得、したがってまた超越論的－現象学的還元を引き続いてとどまる必要はない。日常的な社会生活では、私たちは現象学的に還元された領域における構成現象をほとんど問題にしない。むしろ私たちは、自然的態度においてこれと対応する相関物を問題にしているだけである。」⁽⁹⁾このように、現象学をとおして、諸学において各々に関わる現象がどのように構成されているのか、その諸構造を明らかにすることが目指されていることは明らかである。しかしそれは、フッサールにおける現象学的還元の一部でしかない。フッサールの現象学的還元では、まずは日常世界の現象へと立ち返ってその構成を明らかにすることが求められるが、それとともに、そこへ関わる我々の認識の志向性そのものを浮かび上がらせ、超越論的主観性を獲得するまで還元が進められなければならないのである。

II 生活世界と自然的態度

以上のことから、フッサール現象学が哲学以外の諸科学において部分的に応用されていることが明らかになるのであるが、ここで、現象学的還元で目指されていたことをさらに詳細に検討してみることにする。というのも、後期フッサールの現象学には、生活世界の概念が詳細に展開されており、それは、現象学的分析にとっての重要な位置を占めているからである。

後期フッサールの名著『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』で彼は、現代の人間性の危機は、ガリレイ的客観主義とデカルトの主観主義の分裂から生じているとし、自然主義的客観主義を克服することこそ超越論的現象学の使命であると考え。近代科学は、その発生の基盤であった生活世界を理念化し、あらゆる事象を普遍的で客観的に捉えることができるものとして構成されてしまっているというのである。「つまり、学一般は、人間の作業であること、すなわち、世界のうちに、一般的経験の世界のうちに生きている人間の作業であること、そしてこの作業は、理論的と呼ばれるある種の精神的形成体へ向けられている実践的作業の一種であることが考慮されねばならないのだ。あらゆる実践とひとしく、この作業もまた、行為者自身によっても意識されている独自の意味で、あらかじめ与えられている経験の世界に関係し、また同時にその経験の世界に編みこまれているのである。」⁽¹⁰⁾本来科学は、個別的で経験的なものを含んでいるはずなのであるが、それは忘れ去られてしまっている。「そこでフッサールは、近代科学とは何であり、いかなる構築物であるかを理解するためには、それらがそこから生まれてきたはずの次元へといったん還帰しなければならないと考える。これが科学的世界の『生活世界』への還元である。つまり『生活世界』とは、まずもって科学的世界の基盤をなしていながら、私たちがもつてはすでにその科学的世界によって覆われてしまっている世界のことである。」⁽¹¹⁾フッサールは、生活世界を次のように説明している。生活世界とは、「その世界のうちに目覚めつつ生きているわれわれにとって、いつもすでにそこにあり、あらかじめわれわれにとって存在し、理論的であれ理論以外であれ、すべての実践のための『基盤』となる。世界は、目覚めつつつねに何らかの仕方で実践的な関心をいだいている主体としてのわれわれに、たまたまある時に与えられるというものではなく、あらゆる現実のおよび可能的実践の普遍的領野として、地平として、あらかじめ与えられている」⁽¹²⁾。このような生活世界を問題にするために、フッサールは、自然的態度 (*natürliche Einstellung*) を変更しなければならないとする。この自然的態度とは、次のように説明される。「自然的態度とは意識が実施態におかれ、対象に関わり続けているときに、おのずからとる構えかたである。…自然的態度に生きる限り、ものごとはいつも自明的なものとしてなじまれている。存在者が何であるかはつねに習慣的に了解され、それが在ること自体については不問に付されている。」⁽¹³⁾我々は、生活世界のなかで自然的態度にとどまる限り、まったくの自明な世界のなかであって、その世界や世界との関わりを自覚的に捉えようとすることはない。「自然な精神態度は認識批判にはまだ無頓着である。自然な精神態度をとる場合われわれは感性的直観と思考によって、そのつどわれわれに与え

られる事象に向かっている。すなわちそれぞれの認識の源泉や段階に応じて、その与えられ方や在り方に相違があるにしても、そのつどわれわれに自明的に与えられた事象に向かっているのである。」⁽¹⁴⁾したがって、生活世界への還元は、「それは、言うまでもなく、自然的態度を全面的に変更することによってのみ可能なのである。それは、われわれがもはや、いままでのように自然的に現存する人間として、あらかじめ与えられている世界の恒常的な妥当を遂行することのうちに生きるのをやめ、むしろこの妥当の遂行をたえずさし控えるといった変更である」⁽¹⁵⁾。

このような、世界の「基盤」である生活世界への還元を行うことが現象学的還元であり、それは、生活世界に生きる我々の素朴な自然的態度においてではなく、超越論的態度において可能となる。我々にあらかじめ与えられている生活世界は自明なものとして前提されているのだが、その自明性そのものを問題として、我々が自明なものを認識する仕方にまで問いを向けるのである。

しかしながら、このような生活世界への還元は、当然困難を抱えることになる。というのも、我々は確かに、生活世界のなかにあり、自明的に日常生活を送り、自然的態度を取っている存在なのであるが、他方で、この生活世界にありながらも、自然的態度から脱して超越論的態度を取ることが要求されるからである。そしてさらに、この超越論的態度においては、絶対的な超越論的主観性を獲得することが想定されているのである。フッサールは、このような手続きによって、いわゆる科学的世界の構成を明らかにし、諸学問の「基盤」を取り戻すことができると考えるが、このような困難な要求は、生活世界を著しく複雑にしているわけである。したがって、フッサール現象学は、諸学問に多大な影響を与えながらも、限定的に扱われてしまう。「…だがいづれにしても、無世界的な『超越論的主観性』を内容とする『哲学』としての現象学は除外されている」⁽¹⁶⁾のである。

III 体験の広がり

それでは、我々は、生活世界の問題に対して、一方で自然的態度にあり、他方で自然的態度を脱しなければならないという特有の扱いにくさゆえに、それは超越論的主観性へと向かうための単なる装置であると評価すべきなのであろうか。

1. 生活世界と体験

ここで我々は、生活世界からのインパクトを明瞭にするために、そのなか

で生ずる体験のありようを考えてみることにする。すでに明らかにしたように、我々は体験と経験をおよそ次のように区別する。すなわち、体験は、生じているそれに没入して我々が一体化され、自覚的にその内容を捉えることができないようなものであり、受動的かつ主観的な概念であるのに対して、経験は、生じたものについて事後的に反省が加えられ、そこから何らかの意味づけを行ったり積極的な変化がもたらされたりするものである⁽¹⁷⁾。このような体験や経験の概念をみれば明らかなように、それらは我々の認識の仕方に大きく関わっている。すなわち、我々が我々とともにある世界とどのように関わっているのか、あるいは様々に生じてくる現象をどのように認識しているのか、さらにはそこからいかにして新たな概念を獲得するのか、という問題を含んでいるのである。シュッツは、このような問題を鋭く認識しており、体験と経験の位置づけを問題にしている。「この体験は、その都度の今という位相では体験されるけれども、しかし一般に反省されることはなく、たとえ反省されるとしても、ごく大雑把な漠然とした掴み方しかなされず、したがってその再生は『何かを体験した』という—いわば直観的仕方での—単純な中身の無い表象以上にはうまくいかないのである。」⁽¹⁸⁾「そこで私たちは、経験の全体連関を定義づけて、自由な存在である私が私の持続の一定時点において遂行しうる、その私の経過した位相的構築のなかで構成される諸体験に向ける反省的注意作用（この注意作用のすべての注意変容を含む）全体の総括であるとすることもできる。」⁽¹⁹⁾

シュッツの場合、このようにして、体験を経験の全体連関に組み入れることを意味付与と呼び、われわれは相互に意味付与を行いながら社会的世界を構築しているわけであるから、その多様な仕方を解釈することが重要であるとする。このような試みによって、社会的世界はその構造をあらわにするのである。「こうして、自明視されている物事の区域、つまり、あらゆる探求の出発点であり、かつその前提でもある相対的自然的世界観は、社会的に承認されている過去の経験行動—それはわたし自身の行動のみならず、他者の行動も含めたものであるが—の沈澱物として現れてくる。」⁽²⁰⁾このシュッツの見解からは、以下のことを導き出すことができよう。すなわち、我々は、日常的で無自覚的、無反省な体験を積み重ねて生活を送っているが、このような諸体験を反省的に捉え、それによって一定の意味づけを行う経験を取り出し、それらを自覚的に関連づけることが必要である。そうすると、自明的に与えられている生活世界は、この経験との関係における限りで自明的でないものとして、いわば沈殿（Sedimentierung）⁽²¹⁾として姿を現してくる。ただし、この沈殿はやはりあくまで与えられた体験の次に属するものであり、世界が経験として自覚的に現れるときにおいてのみ、沈殿として潜んでいる

ことが分かるようなものなのである。

このプロセスは、本論考1章で述べたように、フッサールの現象学的還元でいえば、生活世界における自然的態度の判断中止を行い、超越論的態度へと変化させることにはかならない。このような作業を行っていけば、我々に自明的に与えられている世界は、我々の前に、経験のまとまりとして一定の構造を持つような仕方で現れてくる。しかし、我々に与えられている自明的な世界は、すべて明瞭に意味づけられて示されるのではなく、シュッツが沈殿と言い表さねばならなかったように、ここでは同時に、認識の奥底へと潜んで体験の次元にとどまり続ける地平を想定することが要請されていると考えることができる。おそらくこのような意味で、高坂は次のように述べるのできたのである。「一従ってこういうべきであろう。…外界の事物に関する自然的態度は、それに対して現象学的判断停止を行い得る。しかし体験領域はかかる不十全性をもたないが故に、それに対しては現象学的判断停止を加え得ない。逆にいえば、あらゆる自然的態度に判断停止を行っても、一かかる意味で外界の世界即ち超越的存在の世界を否定し去っても、一意識の世界即ち内在的存在の領域は除去し得ない残余 Residuum として残存する。」⁽²²⁾

2. 教育における体験

現象学的還元は、超越論的還元として、生活世界を対象にすると共に、生活世界のうちにある我々の主観の在り方を問題にする。生活世界に住まいながらもそこから超越論的態度を身に付けて反省的に様々な事態に関わり、現象をありのままに捉えようと試みるプロセスは、生活世界の二重性を保持している。つまり、超越論的態度は、生活世界の還元によってその構成が分析され現象が顕わになるということを経て、それを支える自然的態度の地平に、すなわち我々の体験の広がりにより我々の認識をつなぎ止めるのである。

このことを教育における体験として改めて考えてみると、次のようになるだろう。例えば学習者は、はじめに述べたような時刻と時間の概念を習得することによって、それらを明確に区別する科学的認識を身に付けていくのであるが、その概念を反省的に捉え直してみると、日常的なやりとりにおいて用いる時間、すなわち時刻と時間が入り混じっているようなものを体験として保持していたことが明らかになる。その体験の次元は、時刻と時間の概念が科学的認識として客観的に定義されているからといって、完全に捨て去ってしまえばよいというものではなく、普段は無自覚的であるにもかかわらず保持されているものが体験の領域においては認められなければならない。「われわれの手許の知識の貯えはこれまでのいろいろな活動の経験の沈澱化に

よっている。そしてわれわれの活動は実際に通用している、種類の異なる関連性体系によって導かれている。こうした活動を通して習慣的知識が獲得されるのであるが、この知識は通常は休眠中で中性的であるもののいつでも再活性化する可能性を秘めている。動機的関連性は「利害関心のある」状況を形成し、その状況によってこんどは主題的関連性の体系が決定される。主題的関連性の体系は地平的、周辺の素材を主題的領域にもち込み、今後の探求を行う思考と行為にとって問題となるものを決定づける。この主題的関連性は手許の問題に十分な知識と親和性をもたらすのに必要な探求の水準と限度をも設定する。これによって解釈的関連性の体系が設定され、われわれの知識の類型性の構造が決定されるのである。」⁽²³⁾

我々は、教育活動をとおして、おそらくは生活世界の自然的態度において様々な事象を認識し、知識を蓄え、多くの概念を身に付けるが、その途上で、それらを自覚的に経験として把握し、それらの意味を把握しなければならない。「現象学的世界とは、何か純粋存在といったようなものではなくて、私の諸経験の交叉点で、また私の経験と他者の経験との交叉点で、それら諸経験のからみ合いによってあらわれてくる意味なのである。したがって、それは主観性ならびに相互主観性と切り離すことのできないものであって、この主観性と相互主観性とは、私の過去の経験を私の現在の経験のなかで捉え直し、また他者の経験を私の経験のなかで捉え直すことによって、その統一をつくるものである。」⁽²⁴⁾

しかし同時に、教育活動においては、経験として意味づけられている現象の背後にある体験の広がり、体験の豊かさを保証することが求められるように思われるのである。

生活世界の問題を検討することは、我々を、体験や経験の在り方に関する深い考察へと導く。「教育学的思考は、およそ、次のような現象学的洞察を表明する。すなわち、人間の実存の意味地平としての『生活世界』は、決して葬り去られるものではないということ、『生活世界』は、多くはいわば学理論形成の前意識的段階のなかにあって、多かれ少なかれ明示的にその学理論形成を共に規定しているということである。」⁽²⁵⁾「人間の実存の意味地平」として反省的に捉えられる生活世界には、おびただしい数の体験が沈殿している。それらの体験は、顕在化していないからといってまったく働きをもっていないわけではない。むしろ、それらの体験が意識へと顕在化される経験を、多かれ少なかれ「共に規定している」とも言えるのである。

おわりに

本論考では、生活世界の概念を整理すると共に、その複雑な現れ方を吟味し、何らかの意味を浮かび上がらせることを可能にする体験の次元と生活世界との関係について言及してきた。このような体験の次元をさらに検討するためには、生活世界と我々の身体性との関わりについて考察を進めていかなければならないであろう。

註

- (1) 藤井齊亮ほか『新しい算数2上』東京書籍、2011年、6-9頁。
なお、小学校学習指導要領においては、第1学年では「日常生活の中で時刻を読むことができるようにする」とあり、第2学年では「時間について理解し、それをを用いることができるようにする」とある。文部科学省『小学校学習指導要領』2009年、参照。
- (2) 『広辞苑』第5版、岩波書店。
- (3) 拙論「事実教授(Sachunterricht)の認識論的考察－ヴァーゲンシャインの教授学を手がかりに－」、『別府大学紀要』第46号、2005年、参照。
- (4) 拙論「『体験的な学習活動』に関する一考察－体験と経験の可能性－」、『熊本県立大学文学部紀要』第16巻通巻69号、2010年、参照。
- (5) E.Husserl, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie*, in: *Husserliana Bd. VI*, 2. Aufl., 1976, Haag, Martinus Nijhoff., S.71.
細谷恒夫、木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』、中央公論社、1995年、126-127頁。
- (6) 宮野安治「教育の現象学に寄せて」、和田修二編『教育的日常の再構築』玉川大学出版部、1996年、31頁。
- (7) 宮野安治、前掲論文、32頁。
- (8) Vgl., O.F.Bollnow, *Die anthropologische Betrachtungsweise in der Pädagogik*, Essen, 1965.
岡本英明訳『教育学における人間学的見方』、玉川大学出版部、1977年、参照。
- (9) A.Schütz, *Der Sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in der verstehende Soziologie*, 2.Aufl., Frankfurt a.M., 1960., S.56.
佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成 理解社会学入門 [改訳版]』木鐸社、

- 2008年、74頁。
- (10) E.Husserl, a.a.O., S.151.
訳書、212頁。
- (11) 斎藤慶典『フッサール 起源への哲学』講談社、239頁。
- (12) E.Husserl, a.a.O., S.121.
訳書、145頁。
- (13) 新田義弘『現象学と解釈学』筑摩書房、2006年、27頁。
- (14) E.Husserl, *Die Idee der Phänomenologie, Fünf Vorlesungen*, in: *Husserliana Bd. II*, 2. Aufl., 1973, Haag, Martinus Nijhoff., S.17.
立松弘孝訳『現象学の理念』みすず書房、1965年、31頁。
- (15) E.Husserl, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie*, S.96.
訳書、266頁。
- (16) 宮野安治、前掲論文、31頁。
- (17) 拙論「『体験的な学習活動』に関する一考察－体験と経験の可能性－」、参照。
- (18) A.Schütz, a.a.O., S.69.
訳書、86頁。
- (19) A.Schütz, a.a.O., S.104.
訳書、127頁。
- (20) A.Schütz, *Collected Papers II*, *Studies in Social Theory*, edited and introduced by A.Brodersen, M.Nijhoff, The Hague, 1964, pp.133-134.
桜井厚訳『現象学的社会学の応用』御茶の水書房、1997年、67頁。
- (21) フッサールは、この沈殿を、能動的次元における自我の新しい態度決定が受動的次元に移行し、習慣となることであると説明している。
木田元ほか編『現象学事典』弘文堂、1994年、340頁。
- (22) 高坂正顕『西洋哲学史』創文社、1971年、655頁。
- (23) 桜井厚「A. シュッツの基本概念と生活史」、アルフレッド・シュッツ、桜井厚訳、前掲書、325頁。
- (24) M.Merleau-Ponty, *La Phénoménologie de la Perception*, Gallimard, 1945, p.14. 竹内芳郎、小木貞孝訳『知覚の現象学1』みすず書房、1967年、23頁。
- (25) W.Lippitz, *"Lebenswelt" oder die Rehabilitierung vorwissenschaftlicher Erfahrung*, Weinheim u. Basel 1980., S.361.

Das Erlebnis in der Erziehung und die Lebenswelt - Anhand der phänomenologischen Reduktion -

ISHIMURA Hideto

Zusammenfassung

Die Phänomenologie ist eine große Strömung der Philosophie des 20. Jahrhunderts. Vor allem wird der Begriff der Lebenswelt vom späten Husserl entwickelt. Nach Husserl ist "die Lebenswelt ... für uns, die in ihr wach Lebenden, immer schon da, im voraus für uns seiend, 'Boden' für alle, ob theoretische oder außertheoretische Praxis." Phänomenologische Reduktion orientiert uns auf diese Lebenswelt hin, und ferner müssen wir transzendente Erkenntnis erlangen. Also enthält die Lebenswelt eine Zweideutigkeit, d.h., wir versuchen mit der transzendentalen Haltung verschiedene Phänomene reflektierend zu ergreifen, aber gleichzeitig sind wir in der Lebenswelt mit der natürlichen Haltung.

In der Erziehung wird im Allgemeinen gefordert, unbewussten verschiedenen Erlebnissen in der Lebenswelt als Erfahrungen eigentliche Bedeutung zu geben. Aber es sollte nicht in Vergessenheit geraten, dass die Dimensionen und der Reichtum der Erlebnisse zunächst verbürgt werden, denn die Lebenswelt enthält verschiedene "Sedimentierungen" als "Sinndimensionen menschlicher Existenz", die unsere Erfahrung zusammen bestimmen.